

# シャロリン

06

2004/7

スペシャル・インタビュー

## 「阿満利磨先生 に聞く」

教区アラカルト

## 「19組同朋大会」



2p  
BOOKS しゅらりん堂「私の一冊」

3p  
シリーズ 聞く

●聖典講座「イスラム教の世界」

4-9p

スペシャル・インタヴュー

●阿満利磨さんに聞く

10p

教区内諸団体の活動紹介

●坊守会・保護司協議会

11p

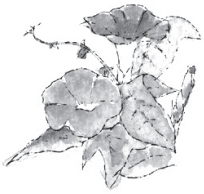
教区アラカルト

●第19組同朋大会

12p

ちよっといこか

しゅらりんちゃん



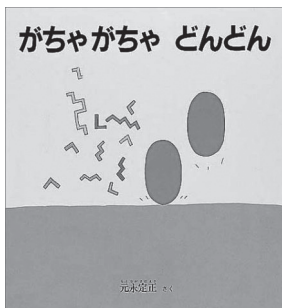
BOOKS しゅらりん堂

推薦 / 第16組 圓光寺  
秦 裕子 さん

老眼になり、細かい字の本が読みにくくなってくる中で、最近心を解放してくれているのが幼児絵本です。1歳4ヶ月になる孫の男の子がどんな本に興味を持つのだろうと、お寺で開設している文庫から数冊の本を選んできては読み聞かせているのですが、その中で出会った一冊が『がちゃがちゃどんどん』でした。私たちの周りにある色々な音を絵で表現しただけの本だけに単純な本ですが、読んで楽しいし、子どもも喜ぶのです。「ぐにゃぐにゃ」「ごー」など、回らない舌で一生懸命まねしようとしてます。

また、この本を通して自然界の音にも耳を澄ましている様子で、鳥の声や飛行機の音、風の音、水の音など、とても興味深そうに反応しています。お陰で私の方まで、日頃生活に追われている時は見上げもしなかつた空の青さや、呼びかけてくれている色々な音の世界に耳を澄ます心地よさを教えられています。

そして、読み聞かせをしていく中で、こ



『がちゃがちゃ どんどん』  
作・元永 定正  
福音館書店  
780円

表紙画像は福音館書店ホームページのものを使用させていただきました。

ちらが意図して勧めようとしたものは間に合わないんだな」ということを思い知らされます。思いがけない言葉に興味を示し、思いがけない出会いを体得していつている孫の様子を見ながら、こちらもワクワクドキドキ……。

この本の中で一番お気に入りのは、最後の「びーいつ」「ぶすん」「ぶ、ぶ」とにかく仲よく一緒に楽しめる一冊です。

お知らせ

表紙がかわつたので、新デザインはどうですか？  
紙の厚さは輪と裏が灯火を  
届けるお話です

リニューアルにともない  
取材・編集・イラスト等の  
スタッフを募集しています  
どおかなあ？  
一緒にやってみませんか

## ●聖典講座・宗教学

### 「イスラム教の世界」

講師／池内 恵 先生

あの9・11以後、特にアメリカによるイラクでの大規模戦闘終結宣言の後、イスラム世界の情報は、今までになかったような勢いで世界に発信されており、日本もその埒外ではありません。しかし、今までに十分な予備知識を持たない者が、殆どの我々日本人にとって、どれ程の理解と共通認識があるのかは疑問です。ちょうどその時期のこの講座、真にタイムリーであったと思います。

イスラム教は、99もの名を持つ唯一神への絶対信仰。多くの名を持たれる阿弥陀如来一仏絶対他力の信仰を旨とする我々真宗門信徒にとっては、今まで思っていた以上に、近いものとして捉えていくことが可能なのではないかと考えさせられました。

宗教が、政治から生活の隅々にまで息づいているイスラム教に対して、今の真宗のあり方を考えてみるよい機会にもなったと思います。よい企画を有難うございました。

(第24組見光寺 日首久実さん)

◆ ◆ ◆  
イラク状況の悪化が進み、敵・味方関係なく、多数の死傷者の報道を見るたび心が痛み、一度イスラム世界の考え、文化、生活を知ること、少し違った見方ができるのではと思ひ聴講しました。

唯一神とその預言者によってすべての世界が創造され、律法による支配と従属というイスラム教の成り立ち、考え方を聴くと、

私たち日本人には理解することが大変だと思いました。そうすると、彼らが仏教やその文化を理解することも大変なんだろうと思いました。時間が約2時間ということ、講義もほんのかじりで終了してしまいました。が、また続きがあれば是非聴講したいと思えます。(第19組南溪寺 竹林正智さん)

#### 【講義抄録】

イスラム教の聖典とは何か。ご存知のコーランです。コーランのことをもともとうまく日本語に訳すと「啓典」となります。神が人間に、啓示によって書物を下す。人間はただそれを受け取って信じる。それに書いてあることに従って生きていく。それが一神教を信じるということなのです。イスラム教だけではなくて、イスラム教と同じ系統のキリスト教やユダヤ教に、かなり共通する考え方です。そして、アラブ世界では、読み書きを教える際にも、まずコーランから教えるのです。コーランを読み、暗誦させ、そのつづり方を教えていくことによって言語を教えます。すると、7世紀の文書であるコーランが、現代人でも読めてしまう。古い文書なのに現代人が読める、というよりはこのような教育法が綿々

と続いていることによって現代語がコーランによって規制されているのです。そのコーランは何を示しているかという、神が全てを創造する、全てを最終的に破壊するということです。唯一の神が、絶対的な力を持つて、人間を含む世界全体を支配している。そういう考え方です。

また啓典は、どういうふうにして人間(世界)に啓示されるか。イスラム教では、預言者という考え方をします。神が「言葉を預ける」のです。まさにコーラン(啓典)を預けたわけで、その預言者がムハンマドです。ただし、ムハンマドはたくさんいる預言者の最後の預言者であって、その一番正しい預言者であったということです。そのムハンマドは、6世紀の後半、570年頃といわれますが、アラビア半島のメッカに生まれます。イスラム教徒はこのメッカに巡礼します。このメッカでムハンマドが610年頃、神から最初の啓示を受けるのです。

コーランは、読んでくださるとわかると思いますが、仏典や聖書とはかなり異なっています。仏教の経典にしても、新約・旧約聖書にしても、何らかのストーリーがあつて、順番に読み進めればよい。難しいにしても読めます。ところがコーランは、そういうふうにかかれていないのです。最初から読んでも、小さい話が並べて書かれているだけで、相互の話が順序だつていないのです。しかしだからこそ神によって分割されて啓示されたそれぞれの章句がそのまま保存されていると信じられているのです。

(文責・大阪教務所)



シリーズ

聞く



スペシャル・インタビュー

## 阿満利磨さんに聞く

日本人にとって宗教とは何かを探求し、また教団の問題点にも「在家」の立場から鋭い指摘をなさっていらっしゃる明治学院大学教授の阿満先生にお話を聞きました。

聞き手＝廣瀬 俊・澤田 見 写真＝大阪教務所

## 仏教、お寺への思い。

——お忙しい時間に申し訳ありません。先生のご本を何冊か読ませていただいて、ちよつと予備勉強をさせていただいたんですが、先生、お寺出身で。

阿満 西本願寺の京都の末寺です。

——出られて？

阿満 そうです。長男だったから、普通だったら、跡を取らなくっちゃいけないかったんでしょうけど、相当早い時期から、こういうお寺だったらやる気はないと、出てしましました。

——あえてまたお寺へ講義へ来られるというのは。

阿満 つまり、お寺は出たけど、仏教から出たわけではないですよ。

お寺のありかたについては、すごく疑問を感じたし、笑い話だけでも、「マツチの火の会」という変な名前の会を作つてね、それで同じ組内の若い住職・住職候補とか

余宗の方のまだ任職になってない若い方とかに呼びかけて、お寺を改革する運動というのを、学生時代にすることがあるのです。なぜ、「マツチの火の会」という変な名前にしたかというと、もういらぬお寺燃やしてしまえと、そういう過激な話でね。

——かわいらしい名前なのに。

阿満 だけれど、思想は過激だったです。僕の考えを後押ししたのは、鈴木大拙さんが、当時京都によく講演に来ておられて、たぶん東本願寺で講演された記事が新聞に載つたのだと思いますが、「いのちを失つたお寺というのは全部破壊したらよろしい」という過激な発言をしておられたんです。それで僕は自信を持ったわけですね。

それで、ただ単に火を付けて燃やしてしまっただけではなくて、僕はひとつのプランを持っていて、組内の6カ寺が、1カ寺だけ残して、後は全部土地を売つてしまおうやないかと。それで、立地条件の良いところにちやんとした会館を建てて、売つたお

金でアパートぐらい造つて、その6カ寺の寺族がそこに入って共同生活をする。それで後は、活動資金として、今でいう町おこしのような運動をやつたらどうだと言つたわけです。

しかし、誰も賛同しませんでしたね。自分たちの住んでいるお寺は、自分たちの私有物だという意識が跡継ぎたちの頭の中にあるから、それをみな提供して、みんな共同で仕事をしようやないか、なんてことはとても受け入れがたい。

ただ、何人かの若い人たちは、影絵なんかと一緒にやるとか、そういう子ども向けの活動をするグループとして参加してくれたり、あるいは、レコードコンサートの会をやるから、それに協力してくれたりとか、ということはありません。

しかし、まあほとんど、相手にされなかったし、特に現職の住職達は全然。何を戯言を言つてるかということでした。

それから、西本願寺の教団改革運動というのがあります。『教団改革』という雑誌が、15冊ぐらいい出ましたでしょうか。信楽峻磨さんなんか、中心になっておられて。僕もどういふわけか、そこにものを書いたりしてね。教団改革というのは、どういふ方向であつたらいいのかというようなこともいろいろ意見を発表しました。

それで、これは、おそらく僕が就職してからだったですね。西本願寺の機関誌に頼まれて、教団のあり方についての、ちよつとしたエッセイを書いたんです。そしたら、教団の責任者から、この原稿は掲載することはできない、ということが出てきて。で



阿満利磨（あま・としまる）

1939年生まれ。京都大学教育学部卒業後、NHK入局。社会教養部チーフ・ディレクターを経て、現在、明治学院大学国際学部教授。日本宗教思想史専攻。

『宗教の深層』（ちくま学芸文庫）、『日本人はなぜ無宗教なのか』『人はなぜ宗教を必要とするのか』（ともにちくま新書）、『法然の衝撃』（人文書院）、『国家主義を超える』（講談社）、『社会をつくる仏教』（人文書院）など著書多数。

僕は、その理由をはつきり言わずにとにかくボツと言ったから、配達証明なんか付けてね、という理由なのかと、その如何によつては、新聞かどこかに公開するとうようなことを言うたんです。それで向こうは慌てて、これから出す宗務所員のための新しい機関誌か何かに転載するから、そちらに出すから、と。要するに何が気にさわったかという、門主制廃止しろということを書いたわけです。同朋教団である限りはね、門主の存在というのは、やっぱり認めたい。それはかちんときたんでしよう。それから以後、西本願寺から依頼

は一切ありません。40年来ありません。私の本も置きません。そういうこともあって僕が考えている仏教のあり方とか、真宗のあり方とか、親鸞の考え方を知れば知るほど、現実のお寺がやっぱりそれと遠いということになって、じゃ寺から出よう、出たほうが自分にとっではいいとなって。出るにあたっては、本当は全部始末して出たかったんだけど、なんかいろいろなことがあって下の弟が跡を継いでおりますけれど。

——なるほどね。

わりと早い時期は、末寺の存在も含めて、教団全部を全否定の在家仏教主義者という生き方を主張したんですけれども。まあ徐々にいろいろ見てみると、本山と末寺とは同列に論じちゃいかんというふうになんか少し緩やかになってきて。というのは、それはやっぱり地方へ行く

と、お寺というのは、新しいコミュニティをつくる中心になる可能性があるから、それは大事にしていってみたいらと。

ただお寺のあり方については、末寺の存在は認めるけれども、末寺の住職のあり方は、檀家の人たちで、互いを選ぶという方式をしてくれるといいなということをしよつちゅう言ってきたことです。特に最近では、定年退職になって、暇になった人があつちこつちにごろごろしてますから、ああいう人に2年単位ずつでもいいから、住職やらしてみるとか。そういう、寺は宗教学法人上、檀家たちのものだと言つても、実際はそうならないということについては反発したり。

だから、お寺のあり方について、ある理想的なあり方はあるけれども、現実には遠い。遠いからといって、しかし、それを批判するだけでなく、その中で頑張っている人は、やっぱり尊敬したいなという気にもなつたし。だから、仏教への思いというのは深いわけ。深いけども、お寺とは、疎遠なのです。そういうことですね。

## 「無宗教」のただなかで…

——創唱そうしよう宗教（注・自然宗教に対し、教祖・教典・教団を持つ宗教全般のことを指す。『日本人はなぜ無宗教なのか』（ちくま新書）より）に無関心な人たち、つまり無宗

教について先生が書かれたところを読んでいたら、自分のところのお寺で考えてみたら、無宗教の人に支えられているお寺やなという感じが、何か教義のこと、お念仏とか本願、何かそういう言葉を出せば、それ

はまた別の話やみたいところで、お寺と門徒というのがなんとか成り立っててという感じがするんです。そんな中にあっても、ともに生きるやとか、同朋やとかね、そういうことを言うていく。だけでも、向こうにとつては、別にそんなことはどうでもええねんという関係が、非常にはがゆいというか……。その無宗教の人たちと、お寺がこれからどうつきあうていけばいいのでしょうか。

**阿満** 無宗教の問題って、ものすごく深刻でね、あの無宗教の中でどれくらいの人が、真宗の場合だと真宗の信心を選ぶというようにおなりになるかというのは、可能性として低いですね。非常に難しい。

それは考えてみたら、法然上人の時代からそうなんです。法然上人の手紙読むとわかりますけど、もう絶えず法然上人の教えから遠い人が増えて、それで法然上人は、地方の状態を知らせてくる手紙なんかのご返事の中に、京都の自分の回りでは、まるでみんな本願から遠い主張をしているけれど、あなたの地方でそれだけ熱心な本願を喜ぶ人がいるというのはすばらしいことだ、というお手紙を書いておられますよ。

ですからね、法然上人の在世の時代から既に、本願念仏を正しく理解して、信心をいただくというような人はそうそういなかった。今よりははるかに多いでしょう。多いけれども、それはやっぱり難しい。いき易くして人無しであつてね、それは昔からそんなことはわかつてることと思うんですね。だからいまさら驚くことはない、と

というのが僕の感じで。

だから、僕はご住職を励ますつもりで言うのでないけれども、ご二代にね、お一人か二人、信心喜ぶ人をお育てになったらね、それはもうすばらしい。それぐらいの比率というかね、会いがたくして会いがたいものだと思いますね。

ただ、縁はできるだけつくつてあげたほうがいいけれども、なかなかそうは簡単にいくものではない。無宗教の人とつき合うのは、仕事だと思つた方がよくてね。無宗教の人とつき合いながら、無宗教の人がそれでも、魔が差したか何かでね、少しおやおやと思う関心を持つことだつてあるわけですから。

——なるほど、魔が差したように。

**阿満** それを大事にしていけば、いいのではないですか。だから、教えは普遍的で全て開かれているのだけれど、人間の方がなかなかね、それにうんというかどうか。宿善ということとはよく言つたと思うけれど、やっぱり宿善の為すところでないんですか。

——なるほどね。

**阿満** 僕の大学はキリスト教系の大学だから、仏教のぶの字も知らない若者ですけれど、今これで10年以上「歎異抄を読む会」というのをやっているんですよ。僅か卒業生3人とかから人ですけどね。それで僕の教え子の第1号の、国際学科博士になつてく

れた子は、真宗の信心を喜ぶ。そういう生き方ですよ。だから、今の若者が、真宗という宗教と無縁かという決してそうではない。ちゃんとわかる子は、わかるわけですよ。だから、みなさんの檀家さんとして集まつておられる方々は、なかなか比率は、打率は低いかもしれんけど、東京なんかで見ていると、まるで関係がないのに、それに惹かれる人たちもいる。

——無宗教やといいながら、片一方ではいわゆるカルト集団に入りたがる若者たちというの、今もオウムなんかでは残つていると思うんですけど、そういう現象というのはどうなんですかね。若者の宗教観というか。

**阿満** 僕が知つてる学生たちを見ている限りは、最初はみんな宗教は怖い、宗教なんかは近づきたくないと言ってます。僕のゼミで、ある程度いろいろ勉強してくると、宗教は大事だということわかつてきた。しかし、他の人に、例えば卒業論文に自分は日本の宗教のことを扱うとはやっぱり言わないというんです。言えば、おまえおかしと言われるから。だから僕も彼らにそう言わんほうがよろしい、就職活動も人事課長の前で、宗教に関心がありますとか、というようなことは言わないほうがいい、今の日本社会では、宗教というイメージがあつてね、絶対プラスにならないから、と言ってますよ。

でも、最初彼らは宗教を怖いと言って、勉強していくと大事なものだと思つてい

う、そのプロセスを見ていくと、人間はどんな人でも、自分はどこから生まれてきてどこへ死んでいくかわからんわけだから、そういう自分をどういうふうにして納得しようかという気持ちがあるわけだから。その納得したいという気持ちが強い人はね、強ければ強いほど宗教の話聞いていくと納得していくし、そういうものを求める気持ちが弱い人はね、できるだけ人を楽しんでいけばいいというようなことになっていく。

そういうふうに宗教という言葉で切らずに、人間という存在はどういう意味によって生きていく存在かというふうに、少し視線を変えて論ずると、宗教がなぜ人類にとって大事な意味があるのかっていうのはわかってくるわけですよ。ですから、今の若者はだあっとオカルト宗教と呼ばれておるものに傾いていく人と、宗教からずうっと距離が空いて無宗教でいく人両方あるけれども、しかし、本当は両方の現象とも、もう一つ掘り下げて、むしろ人間は意味がなければ生きていけない存在だということから議論をしていけば、たとえば特定の創唱宗教は選ばなくても、創唱宗教を選んだ人を尊敬するとか、プラスの価値で見つていうことは可能になると思うんです。

ところが、今の現象だと、もう宗教に関心があったら、あれはカルトであいつたちはおかしいというふうになってしまっし、無宗教は無宗教で、例えばクリスチャンの信者たちは、バカにするんですよ。創唱宗教を選んだ人のひとつの体質かもしれない

いけれども、自分たちと信仰を同じくしない人は、あれは駄目な人たちと排除する。だから、どちらにしても宗教をめぐって、排除しか生まれたいということは、それは宗教に理解が、どこか足りないと思うんです。

だから、今宗教とは何か、ということを知識でいいんだから、ちゃんと説明するよな場がもつとあつたほうがいいと思うんです。それを今、教育基本法を改正して、宗教教育をしないといかんという、非常に反動的なところに宗教が使われそうになっているけれども、そういう宗教の利用の仕方というのは、すごく危険ですよ。だから、広い意味での宗教教育は僕ら非常に大事だと思うけれど、それを政治に絡め取られるという危険性には、ものすごいやっぱり神経を使う必要があるよね。

——その一方で、癒しとか、自分探しとか、そういうものが若い人の中で広がってきているということは、どこか何か求めているような、宗教というものにはいかなければ

ど……つていうのはあるんですよ。

**阿満** だから、宗教を癒しという言葉で置き換えることほど、危険なことはないんだけども、しかし、癒しを求める。

それはベットブームでもそうですよね。話し相手が欲しいから、猫でも話し相手になるのだから、これからますますそうなるでしょう。だから、宗教でなくても、心を癒してくれるものについての欲求はどんどん強くなっていく。しかし、心を癒してくれるものは宗教だという考えはどこか間違いがあって、だからそこで、また宗教とは何かと説明せんならんわけですね。だから、僕も学生たちに宗教とは何かと、問い返してもらうのに2年は最低時間がかかるわけですよ。みんないろんな宗教についての既成観念を持つてるから、それを壊していかなければいけない。だから、癒しで、これでもいいと思つたら、それでもないというふうだね。だから、癒しブームだということは、逆にそれだけ宗教活動がなされないということでもあるわけです。

## アネツクス東本願寺

——まさに毎月の速夜参り、年忌法要、お葬式、そういうことを日々おこなっているのが現状で、なんか社会と真宗というつながりが、ほんと無いに等しいんじゃないかなど、自分でも感じることもあるんですよ。

真宗が速夜参り、年忌法要、お葬式という

こと以外でね、社会とどうつながっていったらいいのでしょうか。それこそ、社会をつくる仏教というふうな、

**阿満** それは、お寺のイメージが年回・葬式・法要でよろしいということ、それを



打ち破るのは大変だと思いますね。

前に長浜教区で話をした時に、特に若いご住職方がおっしゃるには、たとえば私を呼んでくださって講演会をされると、そういうポスターを檀家さんたちのところに貼らせてもらいに行くというんです。そうしたらね、檀家総代たちとか、檀家の人たちはね、熱心なご門徒だと称する人たちがね、ご住職こういうことはやめなさいと、こんなことせんでも年回法要をきちんとやってもらったらいんですと、こんな余計なことをせんでもよろしいというふうに言うと、それでみな困り果てているんだという話を聞かされたことがありますね。いつべん固まったイメージとかレットテルは、なかなかはがしにくいもんですよ。

今、東本願寺の宗務所員の若い人たちとね、ちょっとした会をやっているんですけど、彼らも東本願寺の教団をよくしようと思つて悪戦苦闘しているわけですよ。そういう話を部外者の僕なんかいろいろ話される。僕も、もう40年近くそんな話ばかり聞いてきたわけですよ。確かに良心的な人はいっぱいいらつしやる。しかしみんなつぶれていくわけですよ。

ある時から僕は、もう今の教団を変えて、新しいイメージをつくるというのは、無駄なエネルギーだと、むしろ新しいものを別につくったほうがいいと感じるようになりました。東本願寺の場合だったら、アネックス（注・別館の意）東本願寺というのをつくつたらどうですか。本家の本願寺は今のままでよろしい、ごちゃごちゃいいませんと。しかし、アネックス東本願寺では、

親鸞の教えなり本願念仏中心でね、自分たちが好きなことをやっていく。そういう組織をこぶのように作って、できたら、ひさし貸して母屋取られるようになればいいけども、ひさしが朽ち果てもそれはそれでしようがないと。そういうふうな運動論自体も変えたほうがいいんじゃないかという提案をしたんですよ。

同じことは、末寺にもあてはまつていて、少なくとも末寺を支えてくださってる檀家の10パーセントが、住職のやる方がいいと、新しい方向は結構ではないかというサポートがあればいいと思いますよ。しかしサポートがなくて、住職一人が悪戦苦闘するんだつたらね、住職は別の会を組織した方が。別に檀家の人と関係なくて、つまりお寺の場所離れてもいいかもしれない。別のことをおやりになった方が、エネルギーが無駄でなくなつていいやないかと僕は思いますね。

——アネックス東本願寺はよろしいね。

**阿満** 今の既成のお寺とか教団のイメージは、変わらんですよ。だから、別のことをやって、住職は二足のわらじを履くという道もある。なぜそういうことを僕は強く言うかという点、清沢満之の教団改革運動つてそういう方向をたどつたということですね。清沢満之の教団改革運動、普通は挫折したとか、敗北したとか、というわけですよ。それはやっぱり、確かに当時の教団の体制から言えばつぶされたわけだけど、しかし、彼自身の書いたものを見れば、もう

彼も愛想尽かしたわけね。愛想尽かして別に組織を起こしましよう。それは浩浩洞であつて、東本願寺とは違う組織を使つて、新しい運動を起こしようとした。それが大事じゃないですか。

もつと大げさに言えば、既成教団はそういう異分子を、アネックスAからアネックスZまで、たくさん生み出す母体になつて存続していったら、組織論としてはいいのではないか。

——もしそういうものをたくさんつくつていくとしたら、その原理、いちばん大切なこととはなんでしょうか。

**阿満** それは、ひとつは、せっかく同朋会運動やつてこられたんだから、同朋社会の顕現といわれた、その中味をどう受け取るか。それは、人さまさまな受け止め方があるはずですから、こういうものでなくちゃいかんということはないと思うけれども、しかし、平等ということと、仏教の言葉でいえば、利他というかね。慈悲というかね。その2つが生きて働くような活動だったら、何でもいい。それはそれぞれの、運動する人の主体に任せてね、いろいろお考えになつたらいいと思うんですよ。

——例えば何人が集まつて、社会活動に実際に関わつていこうというときに、必ず出るのは「それは聖道の慈悲ですか浄土の慈悲ですか」というような問いだそうですね。必ず、特に東本願寺の坊さんが集まつたら、その話になつて、結局実際に動けな



いというような問題があるんですけど、考える前に動くべきなのか。

**阿満** だからね、その聖道の慈悲と浄土の慈悲は、何もしない人の言い訳の理屈になつていてしょう。それは一番残念だね。でもそういうことをいう人はおいておいた方がいいですよ。そういう人のお尻たたく必要もないし、そういう人はそういう人でまた考えることだし、争う必要もないし。

この頃、非暴力・平和隊という、新しい組織が起りつつありますね。紛争中に武装せずに入つていって、そして、その両方の立場を調停するというこの運動の日本側の運営委員は70歳代の在家出身の西本願寺のお坊さんです。彼は、3年ほど前に出家したけれども、それまでは会社のサラリーマンですね。縁があつて、西本願寺で得度はして、法名を名乗つておられるけども、彼はこれからは、非暴力・平和隊のような活動が一番大事だし、仏教に生きる人間はそういう活動を支える方にまわるといふことが大事じゃないかと言つて、孤軍奮闘の運動を始めています。それで彼を招いてこの間話をいろいろ聞いたんです。その時に、

浄土の慈悲があるのだということは言えない。自分としては、まだ全力を尽くして人々のために尽くすとか、困っている人を助けるといふ経験は、まだまだ足りない。足りない人間には、あの言葉はまだまだ吐けない、と言われてね。それはやっぱり、人を説得する力がありますね。

だから、繰り返しだけども、いつもあれを出す人はもう相手にする必要はないですよ。

——聖道なのか浄土なのかということ、親鸞の言葉が力になれへんことほど残念なことはないですね。ほんまは、親鸞の言葉はもつと力になつていく、元気になつていく言葉であつてほしいなとは、いつも思うんですけども、だいたいそういう場合というのは、力にならずにやつぱりやめとこか、というようなことに陥つてしまふのが、ほんと残念なことやなと思いますね。今日は長時間どうもありがとうございます。

#### ■インタビューを終えて

以前、阿満先生の講義を聞きに行った友人から、「元気の出る話やつた」という声を聞いたことがある。実際にお会いして、その友人が言つていた意味が良くわかつた。先生がおっしゃった「お寺は出たけど、仏教を出たわけじゃない」という言葉からは、お寺には居るけど、仏教の無い自分の現状を、言い当てられているようにさえ感

じた。

またそのことは、私たちが親鸞聖人の言葉に自信を持たず、本当に頼りにしてない姿を浮き彫りにし、仏教徒として、真宗人として、何を根つ子に生きるべきかを先生のお話全体から伺えたように思う。

いのちを持つて始まつた同朋会運動を昔の話にせず、そのことが「わたしの同朋会運動」として、親鸞聖人の言葉が、今を生きる力になるような歩みをした。

阿満先生の静かな言葉からは、まるで法輪のように前に前にと進む感じを受けたことがとても印象的だった。(廣瀬)

お話を聞いて、先生のお言葉は大谷派という組織の外部から、そのありさまを鋭くあぶり出していただいていると感じた。耳の痛い話ではあるが、同時にそのお言葉は思いやりにもあふれていた。ラディカルであるが、また建設的であつた。

まずまず世の中は「無宗教」の人びとが増えていくだろう。大阪教区はその最前線に立つ教区のひとつなのではないか。そんな中でぼくたちは彼らに届くような言葉を、彼らに受け入れられるような行動を、探し出していかざるをえない日があるのは確実だと思う(実はすでにそういう時はきているのかもしれない)。そんな現在の状況の中で、先生のお話はとても示唆に富み、貴重なものであつたと感じた。

時間が限られていて、充分お話を聞けなかつた。また機会を改めて、続けてお話を聞いていけたらと思う。(澤田)

## 谷 青

各種団体  
活動報告

## 大谷スカウト

る」と規定されており、明確な信仰を持つことを奨励するための「道しるべ」となるものとしての宗教章（仏教章）が制定されています。

2003年8月23日～26日には、難波別院、長居ユースホステルを会場として、「親鸞聖人の教えに学び、ともに大谷スカウトとして自覚と自信を深めるとともに、仏教章取得のための足がかりとする」という主旨のもと、『第17回地方名誉奉仕訓練』（本山青少年部主催）を開催し、指導者スタッフ29名、スカウト18名が全国から参加いたしました。この訓練は毎年各教区持ち回りで開催され、企画運営は当該教区の大谷スカウトのスタッフが中心に担当しております。

今回の奉仕訓練では、今まで行われてきた講義形式を改め、スタッフが作成した台本をもとに、「釈尊伝」「宗祖伝」「真宗の教え」を参加スカウト自身が講師役になり講義を行い、その模様をビデオ収録し、講義ビデオを作成し参加スカウトに配布しました。また期間中の朝夕勤行で使用する三具足も参加者自ら作成し、荘厳しました。

3日目には「まわりやんせ大阪」と題した市内ハイキングを行い、フリーチケットと、携帯電話のメール機能を駆使しながら、石山本願寺跡など大阪市内を斑ごとに課題に挑戦しながら回りました。

今後の予定としては、仏教章取得のための講習会をはじめ、親鸞聖人の御遠忌に向けて活動してまいります。

（大阪教区大谷スカウト連合協議会委員長

奥田祐賢さん）



まず最初に、大谷青年会の主旨ですが、寺族青年男女（15歳～30歳）の親睦を深めるために、様々な活動をしていくことを目的としています。この世代の方々は、いちがいに言えませんが、普段お寺の法務を手伝ったり、他の仕事をしていたり、学校に通っていたりと各々に活動していることが多いかと思いますが、お寺同士の付き合い合いというのは余り縁がないかと思えます。しかし、お寺を切り盛りしていくにあたって、他のお寺の方々との交流は大切なことだと思います。その時に気兼ねなく接していけるためにも、若い世代から交流会や研修会などを通じて、共に遊び、共に学び、問いを分かち合うことによって、親睦を深めようと大谷青年会は日々活動しています。

次に活動内容ですが、毎月行っているの

は「例会」と「学習会」です。例会では、書道教室を同年代の先生に冗談も交えながらわかりやすく指導いただいています。学習会では、声明作法をこちらも同年代の先生に個々のレベルにあわせてわかりやすく指導いただいています。それと年に2回泊研修としまして、夏はキャンプやウエイクボードをしたり、冬にはスキー、スノーボードに行つて親睦を深めています。あとは、2ヶ月ごとぐらいに交流会と題しまして、バーベキューやボーリング大会など様々な企画を催しています。また、寺族としての自覚を認識し、本山の御正忌や難波別院の報恩講に出仕・参詣し、年に1度は本廟奉仕にも参加しています。

最後に、大谷青年会は、毎年新たな企画を立て、新しく会員になられた方の意見も取り入れ、多くの方々に親しんでもらえる会を作りたいと思いますので、是非ともご参加いただければ幸いです。

（大阪大谷青年会会長 箕林智法さん）



大阪教区大谷スカウト連合協議会は、大阪教区内において、ボーイスカウト日本連盟に加盟するスカウトで本協議会の主旨に賛同するものをもって組織し、全国大谷スカウトの主旨及び諸規定に従い、教区内の大谷スカウトの相互の連絡連携を図るのを目的に、現在ボーイスカウト10ヶ団、ガールスカウト3ヶ団、個人登録の加入者によって活動しています。

ボーイスカウト教育規程に「本連盟は、加盟員が明確な信仰をもつことを奨励す

ア  
ラ  
カ  
ル  
ト  
教区

# 第19組同朋大会「南河内真宗門徒の集い」



晴天に恵まれた6月5日、富田林市民会館で開催されました、19組の第15回同朋大会におじゃましました。

19組は南河内の18ヶ寺で構成され、本山指定の第1期推進員養成講座を15年前に終了後、組独自で「真宗入門講座」と銘打って、昨年までに6期もの講座を終了されています。同朋大会は第1回から10回までは毎年行われてきましたが、現在は講座の各期の終了に合わせて、3年に1度開催されています。

まず会場に着くと「南河内真宗門徒の集



い」の看板が目に入り、受付では若い青年寺族スタッフが出迎えてくれました。会場内には子ども連れの女性や、孫を抱いたご婦人もおられ、50代〜60代を中心に幅広い層の参加者が約250人集まっておられました。「つながりを生きる」ともに聞いていこう仏様からのメッセージ」をテーマに、同朋の声・パネルディスカッション・讃歌指導・講演というプログラムで、講師は第27組正行寺前住職當麻秀圓氏でした。

おつとめの後、組長さんは「核家族化が進み断絶の時代と言われる中、人を訪ね、法を訪ねていける『つながり』を大切にしていきたい」と、開会の挨拶をされました。

「同朋の声」では、自分とお手次ぎのお寺や住職さんとの関係を、磁石に譬えたお話や、夫の死を縁として真宗に出会い、

經典の言葉から「できる時に、できることを、できるだけ」といただき、点字の翻

訳のボランティアを続けているお話や、小さい頃よりお寺に出入りして、自然といろんな会に参加するようになりましたが、本山の小屋組み見学をして先人のご苦勞に触れ、改めて相続することの大切さを考えさせられたというお話し等がありました。3人とも具体的に生活の中での問題を取り上げ、心に響く発表をされました。

続くパネルディスカッションでも組の役割の方々やパネラーとなり、それぞれの取り組みについての話をされました。

仏教讃歌の歌唱指導では参加者の声が出るように、ユーモアを交えながら指導され、会場全体がリラックスした雰囲気になりました。

休憩の後、當麻氏の講演「つながりを生きる」では、先の発表を受け、つながりの大切さを網の結び目に譬えられ、自分の都合だけで生きているのではなく、様々なものにつながりを持っている網の目の一つとして、光り輝いていける真宗門徒の念仏の歩みを勧められました。



会場に伺ってみて、800人を動員し、様々な催しをされた前大会の話からする

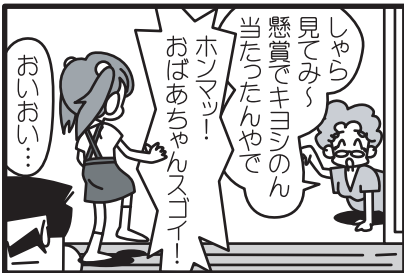


と、今回のいたってシンプルなプログラムにいささか拍子抜けした感じがありました。しかし会が進むうちに、会場内の一体感が生まれ、テーマに則し充実した素晴らしい大会であったと感じました。後片付けをお手伝いしながらスタッフの方から、推進員さんで運営されている19組推進員協議会では、法を聞くだけではなく、人それぞれの生活の中で起こってくる具体的な問題を話し合い、教えに問い直していく研修を続けられていると伺いました。そのような歩みがプログラムに活かされ、また、住職・坊主・寺族・門徒会の方々が、それぞれつながりを大切に行っているからこそ、より充実した大会と感ずることができたのではないのでしょうか。

(松林)

# しゃらりんちゃん

VSおばあちゃんの本箱 編



緊急差し替えコラム「住職ちょっといい話(仮)」

## 「恐怖のコーンスープ」

とある夏の日であった。暑い、うだるような暑さが紗の間衣をワシツカミにする。月に二回はお参りに行くお家。おじいちゃんとおばあちゃんの仲むつまじい二人暮らし。その日おばあちゃんは病院の日で留守のようである。小さな音を立てながら扇風機が軽やかに首を振る中、お勤めが終了。正座のまま後へと身体を向けるとさっきまで座っていたおじいちゃんの姿が見えない。台所で物音がしたと思うと、お盆に何やら乗せておぼつかない足どりでやって来た。「今日はなあ、ちょっとおばあさん病院の日でなあ…」[何処に何があるのやら、さっぱりわからへん、おじゅっさん、こんなんでもよろしいか]と、お盆には缶ジュースのプルトップを空けてストローが一本さしてあった。「おばあちゃんが、おらなんだら不便ですなあ」と僕もお愛想を一言。外は相変わらずの暑さだが、縁側に吊ってあるスタレの隙を抜けて吹く風は、何故かしら涼しさを覚える。床の間には夏らしく金魚の掛け軸。お内仏からのお香の香りが僕とおじいちゃんを優しく包み込む。缶ジュースを片手で掴み、ストローからグツと一吸い。「えっ!」口の中に入ってきたものは、とても液体とは言い難いドロツとしたもの、恐る恐る缶に目をやると、「コーンスープ~つぶ入り~」の文字。なんと…、どうしよう…、しかし…、僕の前で、先週に農協から行った旅行の失敗談を面白おかしく

語っているおじいちゃんにはとても言い出せず、結局半分ほど飲み干してしまった。うだるような暑さの中お腹の中はゴロゴロと音を立てている。後日、ある先輩にその話をすると、その先輩はサラリと一言「へえ〜、コーンスープか、俺はソバつゆ飲まされたことあるでえ!」どちらも、缶ジュース仕立てのにくい奴である。

(廣瀬 俊)



\*「ちょっといい話」で紹介予定だったお店が締め切り間際になってつぶれていることが判明。急遽、このコラムへと差し替えさせていただきました。

発行日：2004年7月1日

発行所：真宗大谷派大阪教務所  
大阪市中央区久太郎町4-1-11  
06-6251-4720

発行人：比良正士

編集： 第4組 常樂寺・久世見証  
第12組 清澤寺・澤田 見  
第12組 乘雲寺・渡邊延江  
第17組 法観寺・廣瀬 俊  
第27組 真善寺・松林俊明  
イラスト：第27組 願隨寺・平野圭晋  
第9組 看景寺・豊島幸代

<http://www.icho.gr.jp/shararin/>

## 編集後記

◆「しゃらりん」第6号をお届けします。◆新しい表紙はいかがだったでしょうか? 見違えてしまいましたか? ◆早いもので「しゃらりん」創刊準備号発行から丸2年が経ちました。私が関わらせていただく様になってからも1年が経ちます。◆表紙を御覧になっておわかりかと思いますが、今号から「しゃらりん」は本格的に紙面変更を行っていきます。教区教化委員会の活動の紹介や各種団体の活動報告も一巡しました。今後どのように紙面を作っていくか、スタッフ皆で頭を悩ませています。すでに、「シリーズ・聞く」からスペシャル・インタヴューという試みがなされています。また、インターネット上での大阪教区教化委員会ホームページ「銀杏通信」との連携も計画されています。◆御意見・御感想などを編集スタッフまでお知らせ頂ければ幸いです。「しゃらりん」ホームページ(左記参照)、また、電子メール(shararin@icho.gr.jp)でもお待ちしております。(K)